



私のインタースキー

会 長 藤 島 勝 雄

今年7月の「第30回北海道スキー指導者協会の集い」の講演は、SAJナショナルデモ監督森信之氏の「インタースキー “指導者の祭典” 他」であった。各国のナショナルチームのフォーメーションビデオや、森講師のワークショップ等の話に触発されて、数々の貴重な体験をし多くの事を学んだ「私のインタースキー」を書いてみたい。

初めてインタースキーなるものに出会ったのは、「1979年第11回蔵王大会」であった。

日本は、ナショナルデモチームが「プルークから高速ターンへの展開」の実技発表。他に「少年アルペンのデモンストレーション」「ポールを利用した指導法」「ハンディキャップスキー指導法」「日本のスキー史」などであった。

北海道スキー連盟教育部は、栗林薫 教育部長発案による「フィットフェルト式ビンディングによる滑降から滑走への展開」であった。

当時、30代の技術員の私にもデモ出場の声がかかったが、既にセフティビンディングの時代に、ごく一部でしか扱われていないフィットフェルト式締め具を「北海道では当たり前に使われている」の考えには到底承服しがたく、如何にスキーの師・栗林先生の勧めであっても辞退した。

一度は海外のインタースキーを体験したく、「SAJ派遣公式視察団」に応募したのは「1987年第13回カナダ・バンフ大会」であった。

しかし、直前になって持病の「椎間板ヘルニア」を発症し、参加を断念せざるを得なかった。折角オーダーした「公式視察団ユニフォーム」

は無駄になってしまった。

私にとって“幻のインタースキー”となった。

初めての参加は、4年後の「1991年第14回オーストリア・サンアントン大会」であった。

この1991年は、森講師の講演にもあった通り、日本のスキー人口がピークの年であり、また、サンアントンが“スキーの聖地”とも呼ばれ、ブンデススポーツハイム（サンクリフトフ）に近いこともあってか、全国から“333人”もの指導員が公式視察団として、この地に押し寄せた（私の地元・苫小牧からも6人も参加した）。

私がインタースキー参加の興味・関心は「どんなテーマを掲げての大会か?」、「各国の、特にスキー先進国の滑りは?」であった。

このサンアントン大会のテーマは、長い技術論争をやっと脱却した「スキーと自然保護」で、多くのシンポジウムが開かれた。

もう一つの興味・関心の各国の滑り。

いくら技術発表・ナショナルデモがメインの場でなくなったとはいえ、各国のトップデモのフォーメーションは大会の華。

この大会での日本チームは、果敢に急斜面で“日の丸”を表現しながらのフォーメーション。

華麗で力強く、圧倒的な力を見せつけたのはオーストリアチームであった。「さすがに日本にスキーを伝えた国だけのことはある」と、感心させられた。

勿論、期間中に“ブンデスハイム詣で”。

伝説のデモ達を輩出した裏山のゲレンデを見て、「こんな小さな丘で・・・!?」であった。

2回目の参加は、8年後の「2003年第17回ス